

Monatsmagazin Japanisch

現地オリジナル取材と編集で
ウィーンを伝える月刊情報紙

創刊平成元年 創刊30年目 **Nr. 342**

月刊ウィーン

GEKKAN-WIEN 2018年2月号



GUSTAV KLIMT, Tod und Leben,
1910/11, umgearbeitet 1915/16

© Leopold Museum, Wien
Foto: Leopold Museum, Wien

レオポルト美術館 特別展「WIEN UM 1900
Klimt - Moser - Gerstl - Kokoschka」にて展示



杉本純の原子力の話II ウィーンと京都 75

筆者が勤務する東京工業大学グローバル原子力安全・セキュリティ・エージェンツ教育院は、文部科学省の支援によりグローバルな原子力危機の分野において、国際的リーダーとして活躍する人材を育成することを目的とした修士・博士課程一貫の学位取得プログラムを実施している。このプログラムは、高い志を持って、人々、社会、および

世界のために貢献するリーダーを育成することを教育目標としている。学生は全寮制の「世界原子力安全・セキュリティ道場」に入門し、一部の教員も学生とともに住み、学生が互いに切磋琢磨する教育環境を整えている。この活動の一環として、寮において学生が自主的に道場ゼミを開催している。学生が自ら提供するテーマについて相互にディスカッションし、幅広い知識や教養、ディベート能力を高めることが道場ゼミの目的・ねらいである。とかく原子力ムラと称される閉鎖的な傾向に陥ることを避けるため、テーマは基本的に原子力に関連しないものが選ばれる。また、留学生がいるため、発表・討論は主に英語で行う。夕食後の午後八時〜十時頃のリラクゼーションプログラムを実施してきた。時折、外部の学識経験者や専門家などに講演をお願いしたり、あるいは東工大の教官が話題

を提供して、その後に学生達による自主的な討論に移ることもある。筆者も、本連載のようなウィーンと京都における歴史・地形及び文化的比較の話をしたことがある。両市の類似性には歴史的必然性があるのでは、というのが学生の主な意見であった。学生同士が英語で活発な討論を行うことを積み重ねることにより、幅広い知識と討論力、さらに国際交渉力につながる実力を身につけつつある。(写真の講師は当時在日フランス大使館、現在はウィーン国際原子力機関勤務。本文、写真とも<http://www.dojo.itech.ac.jp/>より引用)

を提供して、その後に学生達による自主的な討論に移ることもある。筆者も、本連載のようなウィーンと京都における歴史・地形及び文化的比較の話をしたことがある。両市の類似性には歴史的必然性があるのでは、というのが学生の主な意見であった。学生同士が英語で活発な討論を行うことを積み重ねることにより、幅広い知識と討論力、さらに国際交渉力につながる実力を身につけつつある。(写真の講師は当時在日フランス大使館、現在はウィーン国際原子力機関勤務。本文、写真とも<http://www.dojo.itech.ac.jp/>より引用)



さて、今月のウィーンと京都の対比では、両市近郊のスキー場について述べてみたい。ウィーン近郊のスキー場と言えば、市内から車で南に約一時間の所にあるセメリングがウィーンから最も近いスキー場として人気が高い。ナイターコースが六本あり、平日の夜や週末はウィーンから日帰りスキーを楽しむ若者が気軽に車を走らせる。アルプスの有名なスキー場ほど規模は大きくないが、標高九八四mの山頂から一気に滑り降りるため、上級者でもかなり滑り応えがある。一九九五年以来、ワールドカップ女子スキーがここで開催されている。大人も楽しめる木製の本格派な滑り専用ゲレンデがあるのがオーストリアでも珍しい。スキーに疲れたらランチスタンドでホットワインやペンチユで体を温め、しばし息人れるのが楽しい。

スギが六本あり、平日の夜や週末はウィーンから日帰りスキーを楽しむ若者が気軽に車を走らせる。アルプスの有名なスキー場ほど規模は大きくないが、標高九八四mの山頂から一気に滑り降りるため、上級者でもかなり滑り応えがある。一九九五年以来、ワールドカップ女子スキーがここで開催されている。大人も楽しめる木製の本格派な滑り専用ゲレンデがあるのがオーストリアでも珍しい。スキーに疲れたらランチスタンドでホット

一方、京都では、市内唯一のスキー場として、左京区広河原尾花町に位置する広河原スキー場がある。市内から車で約九〇分ほどであるが、豪雪地帯の丹波高地にある。ペアリフト一基と標高六三三五mの山頂からのコースと中間コースで構成された小規模なスキー場である。両コースは連続して滑走できる。山頂コースは林間コースとなっており、山の斜面を蛇行するようにコースが造られている。一方、中間コースは山頂コースに比べて直線的で幅が広く、斜面もないことから滑りやすい。平日及び土曜はナイター営業していることから、平日は仕事帰りの利用者が多い。

この他、東山連峰を越えた滋賀県には、びわ湖バレイ、箱館山、伊吹山などの中規模スキー場が点在しており、京都から日帰りでも十分楽しめるのがウィーンと似ている。余談であるが、筆者はセメリングで何度か滑ったことがある。山頂からの眺めと雪質が良く、空いていて滑りやすかった。広河原スキー場は行ったことはないが、びわ湖バレイには学生時代に数回行き、札幌で鍛えた実力を披露した。目の前の琵琶湖の眺望が素晴らしい。両市近郊のスキー場を紹介できた幸運に感謝しつつ、セメリングでの写真を掲載させていただく。



■ 杉本純 前京都大学教授

元原子力機構ウィーン事務所長 ■